

黒猫

THE BLACK CAT

エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

青空文庫

私がこれから書こうとしているきわめて奇怪な、またきわめて素朴そぼくな物語については、自分はそれを信じてもらえるとも思わないし、そう願ひもしない。自分の感覚でさえが自分の経験したことを信じないような場合に、他人に信じてもらおうなどと期待するのは、ほんとに正気の沙汰さたとは言えないと思う。だが、私は正気を失っている訳ではなく、——また決して夢みているのでもない。しかしあす私は死ぬべき身だ。で、今日のうちに自分の魂の重荷をおろしておきたいのだ。私の第一の目的は、一連の単なる家庭の出来事を、はつきりと、簡潔に、注釈ぬきで、世の人々に示すことである。それらの出来事は、その結果として、私を恐れ

させ——苦しめ——そして破滅させた。だが私はそれをくどくどと説明しようとは思わない。私にはそれはただもう恐怖だけを感じさせた。——多くの人々には恐ろしいというよりも怪奇パロックなものに見えるであろう。今後、あるいは、誰か知者があらわれてきて、私の幻想を単なる平凡なことにしてしまふかもしれぬ。——誰か私などよりももつと冷静な、もつと論理的な、もつとずつと興奮しやすくない知性人が、私が畏怖いふをもつて述べる事からのなかに、ごく自然な原因結果の普通の連続以上のものを認めないよになるであろう。

子供のころから私はおとなしくて情けぶかい性質で知られていた。私の心の優しさは仲間たちにかからかわれるくらいにきわだった。

ていた。とりわけ動物が好きで、両親もさまざまな生きものを私の思いどおりに飼ってくれた。私はたいていそれらの生きものを相手にして時を過し、それらに食物をやったり、それらを愛撫あいぶしたりするときほど楽しいことはなかった。この特質は成長するとともにだんだん強くなり、大人になってからは自分の主な楽しみの源泉の一つとなったのであった。忠実な利口な犬をかわいがつたことのある人には、そのような愉快さの性質や強さをわざわざ説明する必要はほとんどない。動物の非利己的な自己犠牲的な愛のなかには、単なる人間のさもしい友情や薄っぺらな信義をしばしば嘗なめたことのある人の心をじかに打つなにものかがある。

私は若いころ結婚したが、幸いなことに妻は私と性の合う気質

だった。私が家庭的な生きものを好きなのに気がつくと、彼女はおりさえあればとても気持のいい種類の生きものを手に入れた。私たちは鳥類や、金魚や、一匹の立派な犬や、^{うさぎ}兎や、一匹の小猿^{こひる}や、一匹の猫などを飼った。

この最後のものは非常に大きな美しい動物で、体じゅう黒く、驚くほどに利口だった。この猫の知恵のあることを話すときには、心ではかなり迷信にかぶれていた妻は、黒猫というものがみんな魔女が姿を変えたものだという、あの昔からの世間の言いつたえを、よく口にしたものだった。もつとも、彼女だっていつでもこんなことを本気で考えていたというのではなく、——私がこの事から述べるのはただ、ちようどいまふと思ひ出したからにすぎ

ない。

プルートオ（1）——というのがその猫の名であった——は私の気に入りであり、遊び仲間であった。食物をやるのはいつも私だけだったし、彼は家じゅう私の行くところへどこへでも一緒に来た。往来へまでついて来ないようにするには、かなり骨が折れるくらいであった。

私と猫との親しみはこんなぐあいにして数年間つづいたが、そのあいだに私の気質や性格は一般に——酒癖という悪鬼のために——急激に悪いほうへ（白状するのも恥ずかしいが）変ってしまった。私は一日一日と気むずかしくなり、かんしやく癩癩もちになり、他人の感情などちつともかまわなくなってしまう。妻に対して

は乱暴な言葉を使うようになった。しまいには彼女の体に手を振り上げるまでになった。飼っていた生きものも、もちろん、私の性質の変化を感じさせられた。私は彼らをかまわなくなっただけではなく、ぎやくたい虐待した。けれども、兎や、猿や、あるいは犬でさえも、なにげなく、または私を慕って、そばへやって来ると、遠慮なしにいじめてやったものだったが、プルートオをいじめないでくださいの心づかいはまだあった。しかし私の病気はついついてきて——ああ、アルコールのような恐ろしい病気が他にあるか！——ついにはプルートオでさえ——いまでは年をとって、したがっていくらか怒りっぽくなっているプルートオでさえ、私の不機嫌ふきげんのとばっちりをうけるようになった。

ある夜、町のそちこちにある自分の行きつけの酒場の一つからひどく酔っぱらって帰って来ると、その猫がなんだか私の前を避けたような気がした。私は彼をひつとらえた。そのとき彼は私の手荒さにびっくりして、歯で私の手にちよつとした傷をつけた。と、たちまち悪魔のような憤怒ふんぬが私にのりうつた。私は我を忘れてしまった。生来のやさしい魂はすぐに私の体から飛び去ったようであった。そしてジン酒におだてられた悪鬼以上の憎悪ぞうおが体のあらゆる筋肉をぶるぶる震わせた。私はチョツキのポケットからペンナイフを取り出し、それを開き、そのかわいそうな動物ののど咽喉をつかむと、悠々ゆうゆうとその眼窩がんかから片眼かためをえぐり取った。この憎むべき凶行をしるしながら、私は面おもてをあからめ、体がほてり、

身ぶるいする。

朝になって理性が戻ってきたとき——一晚眠って前夜の乱行の毒気が消えてしまったとき——自分の犯した罪にたいしてなかな恐怖の、なかな悔恨の情を感じた。が、それもせいぜい弱い曖昧あいまな感情で、心まで動かされはしなかった。私はふたたび無節制になって、間もなくその行為のすべての記憶を酒にまぎらしてしまった。

そのうちに猫はいくらかずつ回復してきた。眼のなくなった眼窩はいかにも恐ろしい様子をしてはいたが、もう痛みは少しもないようだった。彼はもとどおりに家のなかを歩きまわっていたけれども、当りまえのことであろうが私が近づくとひどく恐ろしが

つて逃げて行くのだった。私は、前にあんなに自分を慕っていた動物がこんなに明らかに自分を嫌きらうようになったことを、初めは悲しく思うくらいに、昔の心が残っていた。しかしこの感情もやがて癩癩に変わっていった。それから、まるで私を最後の取りかえしのつかない破滅に陥らせるためのようになり、天邪鬼の心持がやってきた。この心持を哲学は少しも認めてはいない。けれども、私は、自分の魂が生きているということと同じくらいに、天邪鬼あまのじやくが人間の心の原始的な衝動の一つ——人の性格に命令する、分つことのできない本源的な性能もしくは感情の一つ——であるということを確信している。してはいけないという、ただそれだけの理由で、自分が邪悪な、あるいは愚かな行為をしていることに、

人はどんなにかしばしば気づいたことであろう。人は、掟を、単にそれが掟であるとおきて知っているだけのために、その最善の判断に逆らつてまでも、その掟を破ろうとする永続的な性向を、持つていはいないだろうか？ この天邪鬼の心持がいま言ったように、私の最後の破滅を来たしたのであった。なんの罪もない動物に対して自分の加えた傷害をなおもつづけさせ、とうとう仕遂げさせるように私をせつついたのは、魂の自らを苦しめようとする——それ自身の本性に暴虐を加えようとする——悪のためにのみ悪をしようとする、この不可解な切望であつたのだ。ある朝、冷然と、私は猫の首に輪索わなわをはめて、一本の木の枝につるした。——眼から涙を流しながら、心に痛切な悔恨を感じながら、つるした。——

——その猫が私を慕っていたということを知っていたらこそ、猫が私を怒らせるようなことはなに一つしなかったということを感じていればこそ、つるしたのだ。——そうすれば自分は罪を犯すのだ、——自分の不滅の魂をいとも慈悲ぶかく、いとも畏るべき神おその無限の慈悲の及ばない彼方かなたへ置く——もしそういうことがありうるなら——ほどにも危うくするような極悪罪を犯すのだ、ということを知っていたらこそ、つるしたのだった。

この残酷な行為をやった日の晩、私は火事だという叫び声で眠りから覚まされた。私の寝台のカーテンに火がついていた。家全体が燃え上がっていた。妻と、召使と、私自身とは、やつとのことでその火災からのがれた。なにもかも焼けてしまった。私の全

財産はなくなり、それ以来私は絶望に身をまかせてしまった。

この災難とあの凶行とのあいだに因果関係をつけようとするほど、私は心の弱い者ではない。しかし私は事実のつながりを詳しく述べているのであって、——一つの鑲かんでも不完全にしておきたくないのである。火事のつぎの日、私は焼跡へ行つてみた。壁は、一カ所だけをのぞいて、みんな焼け落ちていた。この一カ所というのは、家の真ん中あたりにある、私の寝台の頭板に向つていた、あまり厚くない仕切壁のところであつた。ここの漆しつ喰くいだけはだいたい火の力に耐えていたが、——この事実を私は最近そこを塗り換えたからだろうと思つた。この壁のまわりに真つ黒に人がたかつていて、多くの人々がその一部分を綿密な熱心な注意をもつ

て調べているようだった。「妙だな！」「不思議だね？」という言葉や、その他それに似たような文句が、私の好奇心をそそつた。近づいてみると、その白い表面に薄肉彫りに彫つたかのように、巨大な猫の姿が見えた。その痕はまあとつたく驚くほど正確にあらわれていた。その動物の首のまわりには縄なわがあつた。

最初この妖怪ようかい——というのは私にはそれ以外のものとは思えなかつたからだ——を見たとき、私の驚きよう愕がくと恐怖とは非常なものだった。しかしあれこれと考えてみてやつと気が安まつた。猫が家につづいている庭につるしてあつたことを私は思い出した。火事の警報が伝わると、この庭はすぐに大勢の人でいっぱいになり、——そのなかの誰かが猫を木から切りはなして、開いていた

窓から私の部屋のなかへ投げこんだものにちがいない。これはきつと私の寝ているのを起すためにやったものだろう。そこへ他の壁が落ちかかって、私の残虐の犠牲者を、その塗りたての漆喰の壁のなかへ押しつけ、そうして、その漆喰の石灰と、火炎と、死骸^{がい}から出たアンモニアとで、自分の見たような像ができあがったのだ。

いま述べた驚くべき事実を、自分の良心にたいしてはぜんぜんできなかつたとしても、理性にたいしてはこんなにあやすく説明したのであるが、それでも、それが私の想像に深い印象を与えたことに変りはなかつた。幾月ものあいだ私はその猫の幻像を払いのけることができなかつた。そしてそのあいだ、悔恨に似ている

がそうではないある漠然ぼくぜんとした感情が、私の心のなかへ戻ってきた。私は猫のいなくなつたことを悔むようにさえなり、そのころ行きつけの悪所あくしよでその代りになる同じ種類の、またいくらか似たような毛並のものがいないかと自分のまわりを捜すようにもなつた。

ある夜、ごくたちの悪い酒場に、なかば茫然ぼうぜんとして腰かけていると、その部屋の主な家具をになつてゐるジン酒かラム酒の大樽おたるの上に、なんだか黒い物がじつとしてゐるのに、とつぜん注意をひかれた。私はそれまで数分間その大樽のてっぺんのところをじつと見ていたので、いま私を驚かせたことは、自分をもっと早くその物に気がつかなかつたという事実なのであつた。私は近

づいて行って、それに手を触れてみた。それは一匹の黒猫——非常に大きな猫——で、プルートオくらいの大きさは十分あり、一つの点をのぞいて、あらゆる点で彼にとてもよく似ていた。プルートオは体のどこにも白い毛が一本もなかったが、この猫は、胸のところがほとんど一面に、ぼんやりした形ではあるが、大きな、白い斑はんてん点で蔽おおわれているのだ。

私がさわると、その猫はすぐに立ち上がり、さかんにごろごろ咽喉を鳴らし、私の手に体をすりつけ、私が目をつけてやったのを喜んでいるようだった。これこそ私の探している猫だった。私はすぐにその主人にそれを買いたいと言い出した。が主人はその猫を自分のものだとは言わず、——ちつとも知らないし——い

ままだに見たこともないと言うのだった。

私は愛撫をつづけていたが、家へ帰りかけようとすると、その動物はついて来たいような様子を見せた。で、ついて来るままにさせ、歩いて行く途中でおりおりかがんで軽く手で叩いてやった。家へ着くと、すぐに居ついてしまい、すぐ妻の非常なお気に入りになった。

私はというと、間もなくその猫に対する嫌悪の情が心のなかに湧き起るのに気がついた。これは自分の予想していたこととは正反対であった。しかし——どうしてだか、またなぜだかは知らないが——猫がはつきり私を好いていることが私をかえつて厭がらせ、うるさがらせた。だんだんに、この厭でうるさいという感情

が嵩こごうじてはげしい憎しみになつていった。私はその動物を避けた。ある慚ざん愧きの念と、以前の残酷な行為の記憶とが、私にそれを肉体的に虐待しないようにさせたのだ。数週の間、私は打つとか、その他手荒なことはしなかつた。がしだいしだいに——ごくゆっくりと——言いようのない嫌悪の情をもつてその猫を見るようになり、悪あく疫えきの息吹いふきから逃げるように、その忌いむべき存在から無言のまま逃げ出すようになった。

疑いもなく、その動物に対する私の憎しみを増したのは、それを家へ連れてきた翌朝、それにもプルートオのように片眼がないということを見つけたことであつた。けれども、この事がらのためにそれはますます妻にかわいがられるだけであつた。妻は、以

前は私のりっぱな特徴であり、また多くのもつとも単純な、もつとも純粋な快樂の源であつたあの慈悲ぶかい気持を、前にも言つたように、多分に持っていたのだ。

しかし、私がこの猫を嫌えば嫌うほど、猫のほうはいよいよ私を好くようになってくるようだった。私のあとをつけまわり、そのしつこさは読者に理解してもらうのが困難なくらいであつた。

私が腰かけているときにはいつでも、椅子いすの下にうずくまったり、あるいは膝ひざの上へ上がつて、しきりにどこへでもいまいましくじやれついたりした。立ち上がつて歩こうとすると、両足のあいだへ入つて、私を倒しそうにしたり、あるいはその長い鋭い爪つめを私の着物にひっかけて、胸のところまでよじ登つたりする。そんな

ときには、殴り殺してしまいたかったけれども、そうすることを差し控えたのは、いくらか自分の以前の罪悪を思い出すためであったが、主としては——あっさり白状してしまえば——その動物がほんとうに怖かったためであった。

この怖さは肉体的災害の怖さとは少し違っていた、——が、それでもそのほかにそれをなんと説明してよいか私にはわからない。私は告白するのが恥ずかしいくらいだが——そうだ、この重罪人の監房のなかにあつてさえも、告白するのが恥ずかしいくらいだが——その動物が私の心に起させた恐怖の念は、実にくだらない一つの妄想もうそうのために強められていたのであった。その猫と前に殺した猫との唯一ゆいいつの眼に見える違いといえ、さつき話したあ

の白い毛の斑点なのだが、妻はその斑点のことで何度か私に注意していた。この斑点は、大きくはあつたが、もとはたいへんぼんやりした形であつたということ、読者は記憶せられるであろう。ところが、だんだんに——ほとんど眼につかないほどにゆつくりと、そして、長いあいだ私の理性はそれを気の迷いだとして否定しようとおせつていたのだが——それが、とうとう、まったくきつぱりした輪郭となつた。それはいまや私が名を言うも身ぶるいするような物の格好になつた。——そして、とりわけこのために、私はその怪物を嫌い、恐れ、できるなら思いきつてやつつけてしまいたいと思つたのであるが、——それはいまや、恐ろしい——もの^{すこ}凄^い物の——絞首台の——形になつたのだ！——おお、恐

怖と罪惡との——苦悶くもんと死との痛ましい恐ろしい刑具の形になつたのだ！

そしていまこそ私は実に単なる人間の惨めみじさ以上に惨めであつた。一匹の畜生が——その仲間の奴やつを私は傲ごうぜん然と殺してやったのだ——一匹の畜生が私に——いと高き神の像かたちかたどに象つて造られた人間である(2) 私に——かくも多くの堪えがたい苦痛を与えるとは！ ああ！ 昼も夜も私はもう安息の恩恵というものを知らなくなつた！ 昼間ほかの動物がちよつとも私を一人にしておかなかつた。夜には、私は言いようもなく恐ろしい夢から毎時間ぎよつとして目覚めると、そいつの熱い息が自分の顔にかかり、そのどつしりした重さが——私には払い落す力のない悪魔の化身が

——いつもいつも私の心臓の上にお圧しかかっているのだった！

こういつた呵か責しやくに押しつけられて、私のうちに少しばかり残っていた善も敗北してしまった。邪悪な考えが私の唯一の友となつた、——もつとも暗黒な、もつとも邪悪な考えが。私のいつもの気むずかしい気質はますますつにつて、あらゆる物やあらゆる人を憎むようになった。そして、いまでは幾度もとつぜんに起るおさえられぬ激怒の発作に盲目的に身をまかせたのだが、なんの苦情も言わない私の妻は、ああ！ それを誰よりもいつもひどく受けながら、辛抱づよく我慢したのだった。

ある日、妻はなにかの家の用事で、貧乏のために私たちが仕方なく住んでいた古い穴蔵のなかへ、私と一緒に降りてきた。猫も

その急な階段を私のあとへついて降りてきたが、もう少しのこと
で私を真つ逆さまに突き落そうとしたので、私はかつと激怒した。
怒りのあまり、これまで自分の手を止めていたあの子供らしい怖
さも忘れて、斧おのを振り上げ、その動物をめがけて一撃に打ち下ろ
そうとした。それを自分の思ったとおりに打ち下ろしたなら、も
ちろん、猫は即座に死んでしまつたらう。が、その一撃は妻の手
でさえぎられた。この邪魔立てに悪鬼以上の憤怒に駆られて、私
は妻につかまれている腕をひき放し、斧を彼女の脳天に打ちこん
だ。彼女は呻うめき声もたてずに、その場で倒れて死んでしまった。

この恐ろしい殺人をやってしまったと、私はすぐに、きわめて慎
重に、死体を隠す仕事に取りかかった。昼でも夜でも、近所の人

々の目にとまる恐れなしには、それを家から運び去ることができないということとは、私にはわかつていた。いろいろの計画が心に浮んだ。あるときは死骸を細かく切つて火で焼いてしまおうと考えた。またあるときには穴蔵の床にそれを埋める穴を掘ろうと決心した。さらにまた、庭の井戸のなかへ投げこもうかとも——商品ののように箱のなかへ入れて普通やるように荷造りして、運搬人に家から持ち出させようかとも、考えてみた。最後に、これらのどれよりもずっといいと思われる工夫を考えついた。中世紀の僧（そ）侶（うりよ）たちが彼らの犠牲者を壁に塗りこんだと伝えられているように——それを穴蔵の壁に塗りこむことに決めたのだ。

そういつた目的にはその穴蔵はたいへん適していた。その壁

はぞんざいにできていたし、近ごろ粗い漆喰を一面に塗られたばかりで、空気が湿っているためにその漆喰が固まっていなかった。その上に、一方の壁には、穴蔵の他のところと同じようにしてある、見せかけだけの煙突か暖炉のためにできた、突き出た一カ所があつた。ここの煉瓦れんがを取りのけて、死骸を押しこみ、誰の目にもなにも一つ怪しいことの見つからないように、前のおりにすつかり壁を塗り潰つぶすことは、造作なくできるにちがいない、と私は思った。

そしてこの予想はずれなかつた。鉄かなてこ槌てこを使って私はたやすく煉瓦を動かし、内側の壁に死体を注意深く寄せかけると、その位置に支えておきながら、大した苦もなく全体をもとのとおりに

積み直した。できるかぎりの用心をしてモルタル膠泥と、砂と、毛髪とを手に入れると、前のと区別のつけられない漆喰をこしらえ、それで新しい煉瓦細工の上をとても念入りに塗った。仕上げでしまうと、万事がうまくいったのに満足した。壁には手を加えたような様子が少しも見えなかった。床の上の屑くずはごく注意して拾い上げた。私は得意になってあたりを見まわして、こうひとりごと独言を言った。——「さあ、これで少なくとも今度だけは己おれの骨折りも無む駄だじゃなかったぞ」

次に私のやることは、かくまでの不幸の原因であったあの獣を捜すことであつた。とうとう私はそれを殺してやろうと堅く決心していたからである。そのときそいつに出会うことができたなら、

そいつの命はないに決っていた。が、そのずるい動物は私のさつきの怒りのはげしさにびっくりしたらしく、私がいまの気分であるところへは姿を見せるのを控えているようであった。その厭でたまらない生きものがいなくなつたために私の胸に生じた、深い、この上なく幸福な、安堵あんどの感じは、記述することも、想像することもできないくらいである。猫はその夜じゆう姿をあらわさなかつた。——で、そのために、あの猫を家へ連れてきて以来、少なくとも一晩だけは、私はぐつつりと安らかに眠つた。そうだ、魂に人殺しの重荷を負いながらも眠つたのだ！

二日目も過ぎ三日目も過ぎたが、それでもまだ私の呵責者は出てこなかつた。もう一度私は自由な人間として呼吸した。あの怪

物は永久にこの屋内から逃げ去ってしまったのだ！ 私はもうあいつを見ることはないのだ！ 私の幸福はこの上もなかった！

自分の凶行の罪はほとんど私を不安にさせなかった。二、三の訊し問もんは受けたが、それには造作なく答えた。家宅搜索さえ一度行われた、——が無論なにも発見されるはずがなかった。私は自分の未来の幸運を確実だと思った。

殺人をしてから四日目に、まったく思いがけなく、一隊の警官が家へやって来て、ふたたび屋内を嚴重に調べにかかった。けれども、自分の隠いんとく匿とくの場所はわかるはずがないと思つて、私はちつともどぎまぎしなかった。警官は私に彼らの搜索について来いと命じた。彼らはすみずみまでも残るくまなく捜した。とうとう、

三度目か四度目に穴蔵へ降りて行つた。私は体の筋一つ動かさなかつた。私の心臓は罪もなくして眠っている人の心臓のように穏やかに鼓動していた。私は穴蔵を端から端へと歩いた。腕を胸の上で組み、あちこち悠々^{ゆうゆう}と歩きまわつた。警官はすっかり満足して、引き揚げようとした。私の心の歓喜は抑えきれないくらい強かつた。私は、凱歌^{がいか}のつもりでたつた一言でも言つてやり、また自分の潔白を彼らに確かな上にも確かにしてやりたくてたまらなかつた。

「皆さん」と、とうとう私は、一行が階投をのぼりかけたときに、言つた。「お疑いが晴れたことをわたしは嬉しく^{うれ}思います。皆さん方のご健康を祈り、それから少し礼儀を重んぜられんことを

望みます。ときに、皆さん、これは——これはなかなかよくできている家ですぜ」「なにかをすらすら言いたいはげしい欲望を感じて、私は自分の口にしてることがほとんどわからなかつた」——「すてきによくできている家だと言つていいでしょうな。この壁は——お帰りですか？ 皆さん——この壁はがんじょうにこしらえてありますよ」そう言つて、ただ氣違ひじみた空威張からいばりから、手にした杖つえで、ちやうど愛妻の死骸が内側に立つている部分の煉瓦細工を、強くたたいた。

だが、神よ、魔王の牙きばより私を護まもりまた救いたまえ！ 私の打つた音の反響が鎮しずまるか鎮しずまらぬかに、その墓のなかから一つの声が私に答えたのであつた！——初めは、子供の噉すり泣きのよ

うに、なにかで包まれたような、きれぎれな叫び声であつたが、それから急に高まつて、まったく異様な、人間のものではない、一つの長い、高い、連続した金切声となり、——地獄に墜ちてもだえ苦しむ者と、地獄に墜して喜ぶ悪魔との咽喉のどから一緒になつて、ただ地獄からだけ聞えてくるものと思われるような、なかば恐怖の、なかば勝利の、号泣——慟哭どうこくするような悲鳴——となつた。

私自身の気持は語るも愚かである。気が遠くなつて、私は反対の側の壁へとよろめいた。一瞬間、階段の上^にいた一行は、極度の恐怖と畏懼いぐとのために、じつと立ち止つた。次の瞬間には、幾本かの逞たくましい腕が壁をせつせとくずしていた。壁はそっくり落ち

た。もうひどく腐爛ふらんして血魂が固まりついている死骸が、そこにいた人々の眼前にすつくと立った。その頭の上に、赤い口を大きくあけ、爛々たる片眼かためを光らせて、あのいまわしい獣すわが坐すわっていた。そいつの奸策かんさくが私をおびきこんで人殺しをさせ、そいつのたてた声が私を絞刑吏に引渡したのだ。その怪物を私はその墓のなかへ塗りこめておいたのだった！

(1) Pluto —— ローマ神話の下界の王。冥府めいふの王の名。

(2) 旧約全書創世記第一章第二十六—二十七節、「神いい給いけるは我儕われらに象かたどりて我儕われらの像かたちのごとく我儕人を造

り……と、神その像の如ごとくに人を創造つくりたまえり。即すなわち
神の像の如くに之を造り云々うんぬん」

青空文庫情報

底本：「黒猫・黄金虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年8月15日発行

1995（平成7）年10月15日89刷改版

1997（平成9）年第93刷

入力：大野晋

校正：宮崎直彦

1999年2月4日公開

2014年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒猫

THE BLACK CAT

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>